

「山口大学国際シンポジウムー大学の国際協力活動と新 JICA との連携」

10 大学が参加し、活発な議論が行われました

効果的な国際協力事業の実施のために、大学の持つ人材や知見を活用する事が求められています。大学にとっても開発途上国の発展に貢献するとともに、研究や教育における海外のフィールドを確保できるといった効果が期待されます。一方、地方の大学においては情報の入手や国際協力に参加可能な人材の不足といった課題も多いと考えられます。こうした状況を踏まえ、政府開発援助（ODA）の実施機関である国際協力機構（JICA）と連携して、大学が国際協力を推進するためにはどのような課題があるのか、その課題を乗り越えるためにはどのような方策があるのかを考えるためのシンポジウムが、2月17日（火）に山口大学 大学会館で開催されました。

シンポジウムでは主催者を代表して山口大学 丸本卓哉学長が、山口県内の大学以外のリソース（企業、自治体、市民団体等）とも協力しあって、地域発の国際交流・国際協力を山口大学の特色として推進していきたいと、力強く挨拶した。引き続いて埼玉大学 丹呉圭一教授、JICA 人間開発部 渡辺雅人次長、JICA 青年海外協力隊事務局 笹館孝一次長が、それぞれの立場から大学の国際協力の課題、JICA との連携の可能性に関する問題提起を行った。

問題提起者に広島国際学院大学 石坂広樹准教授、山口大学農学部 宇佐見孝一教授が加わった「JICA から見た大学、大学から見た JICA」と題するパネルディスカッションでは、大学側の事務体制の整備・強化や協力活動に参加した教員の授業担当をどうするかといった現実的課題から、大学の持つ理論的「知」と協力現場で生まれる経験的「知」の衝突をどのように融和させるのかといった大学ならではの視点を含めて、大学の国際協力活動に関する幅広い議論が行われた。

シンポジウムに参加した各大学からは、国際協力活動の現状が報告されるとともに、単独の大学で積極的に JICA と連携した活動を実施するには多くの課題があるとの発言が相次いだ。最後に、パネルディスカッションにコメンテーターとして参加いただいた（財）交流協会理事長 畠中篤山口大学学長特別顧問から、『丸本学長は国際協力を大学の重要な活動の一つと位置づけておられる。学生に世界を知らせることは日本の人材育成でもあり、国際協力を考えることが大学の研究や教育にとっても重要である。』と結論づけた上で、国際協力活動に対する大学内での支援体制、JICA 事業への参加が大学にとって高いハードルと感じられる制度といった点に JICA、大学双方が互いに知恵を出し問題解決に努力すべきであると助言された。また、JICA の途上国支援の目的と大学が実施する国際協力活動の目的はそれぞれ異なっていることを理解した上で、相互が補完、利用することを考えるべきだと示唆された。

全体討議では、山口市原田国際交流室長から山口市の国際交流活動への取り組みの紹介と、地方自治体の活動に対する大学の協力や参画が要望された。また、「山口大学国

際シンポジウム」を今回だけのものとせず、地方の大学の国際協力に有益となるテーマを選んで継続する事が確認された。同時に地方大学が連携して国際協力活動に参加するためのネットワーク作りを検討したいとの要望が出された。

今回のシンポジウムには、岡山大学、九州大学、埼玉大学、島根大学、鳥取大学、長崎大学、梅光学院大学、広島経済大学、広島国際学院大学、山口大学からの教職員に加え、山口市、宇部環境国際協力協会、その他市民の方を交え 60 余名の参加があった。

山口大学では今回シンポジウムを受けて、「国際協力活動における大学と民間企業の連携」、「国際機関と大学との連携」といったテーマでの「山口大学国際シンポジウム」を企画すること、中国地方の大学を中心とする「国際協力推進大学コンソーシアム」の結成に向けた検討を進めたいと考えています。